

## 石造物研究の六十年

## おりおりの記(一)

軸丸 勇

(会員 宇目町大字千束)

## 〈大野町の石幢〉

少し前のことになるが大野町で「石造美術」の現地研修会を行い、主に県指定の物件を対象に見学して回ったことがある。

鎌倉時代建久年間に領主が大友荘から下向したと言う土地だけあって、色々なものの多いのに驚く。しかしあまりにも時間が経ち過ぎたため、その時代の遺物は片隅に追いやられた感じがする。いつの世も新しいものを求めるのはいずこも同じである。その中で室町期のちよつと変わった石幢を紹介しよう。この石幢は俗に言う泊まり寺、大友初代義直の奥方の隠居所との伝説のお寺にあ

る。

県下に多く分布する石幢は地藏六体のものか、閻魔庁の役人二人含めて八体の型が多く見られる。しかしこの石幢は一四体の仏(菩薩)が刻まれている。それも後牌型に彫り窪め、そのなかに仏像が浮き彫りされているが、長い年月風雨に曝されているため、像容ははっきりしない。

竿石(地上高一トシ)に直径三〇センチの月輪(がつりん)があり、各輪の中それぞれに文字が微かに見える。龕部の仏像の数と月輪内の文字の数に、関連があると思われる点がある。それは月輪内の文字が微かではあるが二文字綴りのようであり、大野町史(日名子太郎・羽田野一郎大野町文化財調査資料)を参考にしながら読むと、聖実・蓮光・妙円・道昌・妙西・延妙・妙□・宗永・祐知・宗玖・道仙・道弥・妙弥・徳□などの銘は龕仏の数と一致する。おそらく此の一四名の方々の追善供養のために建立されたものであろう。

この塔を全体的に見るに、竿石と中台の形態があまりにも不釣り合いに見える。これは地震か突風にあおられ倒壊し、中台が破損あるいは紛失したか詳細は不明であ

るが、竿石のホゾと傘石の宝珠受けの穴がほぼ一致するため、現状のようになったのではあるまいか。龜部から上があまりにも貧弱な感じがする。此の年代(延徳三年〔二四九一〕)頃までは、比較的大きな露盤・伏鉢・宝珠を置いた石塔が多いようである。室町時代頃のお霊屋など、地震や強風にぐらつくことのないよう、比較的大きめの露盤・宝珠を寄棟の中心上に設置した遺構が、数は少ないがいまに残っている。いづれにしても県下には他に例を見ない貴重な存在である。

また塔から少し離れた処に関東型宝篋印塔が、すこし地中に埋もれ、関東型特有の複蓮弁がやつと地上に上部の膨らみを見せている。この塔はどう見ても室町中期以前の形態をよく表わしている。大野町内には数多くの石塔が各所に見受けられるが純の関東型が見当たらない。表面仕上げは勿論、各部の入念な彫刻の跡が伺える。惜しいかな露盤・伏鉢・相輪が失われている。願わくば今少し地中に埋もれた部分を地上に出してもらいたいものである。

## 鏡 峠

弥生町床木・津久見市境の峠。標高四六六尺。鏡嶺・鏡山(豊後国志)ともいう。東は竹越峠・彦岳、南西は尺間山の連山で、秩父古生層の砂岩・粘板岩互層の中起伏山地である。江戸期は床木から津久見方面への佐伯藩の巡検コースであったが、現在は林道となり車輛は通れない。

「豊後国志」に「佐伯莊牀木村の北にあり。路は鑿固屋に達す。衆山連亘三里余山背を渉る。総じてこれを名づけて鏡山という。山畔の道に石あり、大方四五尺。其面滑平にして光あり。よく人を鑿べし。名づけて鏡石という。路屈曲盤回、三十余曲、始めて其巔に出づ。四望すれば即ち大洋足下より起ち、水天一色、涯際を知らず。但し予・土の黛色雲に接するを見る。南は則ち日州の海浜掬すべく、その景勝一郡における最となす」とあり、頂上からは伊予・日向の地を望むことができ、海部郡一の景勝地と記している。(『角川日本地名大辞典』)